

日米外交

日本外交の軸は、何といつても対米協調にある。それはひとり、政治や防衛、経済や貿易においてはばかりでなく、思想や文化の領域においてもそうである。二国間の関係で、これほど濃密な関係は少ないし、これほど世界に大きい影響をもっている関係も類例が乏しいといえよう。

戦後アメリカは、『バックス・アメリカーナ』の理想を掲げて、世界の民主的な再建に希望と自信をもって臨んだ。初期においては、すべてはスムーズに進むかみえたが、その後の経過は必ずしも思うに任せなかった。ソ連に対しては、冷戦から共存へ、中国に対しては封じ込めから和解へ、ベトナムでは介入から収束へと転じた。かくてアメリカは、じりじりとはあるが、当初の路線を転換しなければならなくなり、ベトナムのようにその威信を損なう羽目に追い込まれた場合もあった。経済においては、世界経済の自由化と協調、さらには発展途上国への援助等に、アメリカは先頭に立って指導的役割を果たしてき

た。ところがドルと金との兌換停止の前後から、アメリカはその世界経済の指導力にかなりの衰えを見せはじめた。そうした対外的蹉跎に加えて、アメリカはその内政面においても、諸々の社会的紐帯が衰えを見せ、それを支えるモラルにも弛緩を招くに至った。

こうした戦後の経過は、アメリカにとって大きい試練であったが、それがそのまま世界にとつてもきびしい成行きであった。たしかにアメリカは、戦後世界のために多くのことをなしたが、そのため多くのものを失ったようである。しかし、それにもかかわらずアメリカは今日、依然として世界に対して最も大きい影響力と責任をもつ大国である。また日本にとつても、かけがえのない友好国であり、パートナーであることに変わりはない。

私はその間、前後二回、通算四年余り、外務大臣として対米関係の調整に当たった。そしてディーン・ラスク、ウィリアム・ロジャース、ヘンリー・キッシンジャーの三代にわたる國務長官と、終始楽しく仕事を共にすることができたことを悦んでいる。

ラスク氏は、ケネディ、ジョンソン両大統領の下において、冷戦外交の手堅い担い手として活躍したが、現在では公務を退いて田園に帰り、静かな余生を楽しまれている。ロジャース氏は、対話と協調の時代にすぐれた対応力を発揮され、その率直さと暖かい人間味

は、内外の評価と尊敬をあつめた。今ではニューヨークとワシントンで、弁護士として活躍されている。またキッシンジャー氏は、危機的状況を迎えた世界におけるスケールの大きい外交戦略家として、すでに定評のあるところである。国務長官を退かれてからは、世界待望のメモワールを執筆中と聞いている。

私は、この三人の友人と、相互信頼の中で仕事を共にすることができたばかりでなく、今日にいたるまで、友情と信頼をもち続けていることを誇りに思っている。この方々と私は、日米二国間の問題はもとより、中国問題、ベトナム問題、エネルギー問題、世界経済の問題等につき頻繁に話し合い、協力し合った。

だが、それらのいずれの問題についても、日米間の立場と見解は必ずしも一致したわけではない。しかし、外交においては、たとえ合意の達成ができなくても、お互いにその立場を理解し合っていることが不可欠であり、相互の理解と信頼は、合意を達成することに劣らず重要である。とりわけ日米間においては、そのことは絶対といってよいほど大切である。それにつけても思い出すのは、石油危機直後のキッシンジャー国務長官との折衝である。

昭和四十八年十月は、われわれにとって忘れ難い歴史の節目であった。いうところの石油

ショックが発生し、世界経済全体がオモチャ箱をひっくり返したような混乱に見舞われた。わが国は、ほとんど石油を産出しない国であり、しかも所要エネルギー資源の中で、石油の占めるシェアが減法高い国でもある。日本は戦後二十数年間、一バーレル当り二ドル内外の安定した値段で、いくらでも、何の不安もなく石油を輸入することができた。そして経済は飛躍的な成長を記録することができた。その石油が一挙に四倍にも値上りしたばかりでなく、事実、今後供給が保証されるかどうか判らないという、大いなる不安の中に投げこまれたのである。

政府も民間も、全く途方に暮れた。われわれのよって立つ基盤自体に大きい亀裂が生じ、動揺が起きたからである。右往左往するのも無理はなかった。外相である私に対しても、政府の内外から、中近東に対する外交方針をアラブ寄りに転換するよう強い要請が出始めてきた。また、メジャー以外のルートから石油を確保する方途を講ずるよう、これまた各方面から強い圧力があつた。

しかし私は、産油国といえども、石油を売らなければやっていけないし、日本のような大口の安定した需要国の存在は、彼らにとっても大切な顧客である筈である。したがって、

何もそう周章狼狽することはないと観念し、これらの要請には終始クールに対処することにした。しかし、渴ききつた空気は容易におさまる気配をみせず、中近東政策の転換を求める声は、日増しに高まるばかりであった。そこで私は、かならずしもその主張に賛成はできなかったが、どうしても政府がやるというのであれば、事前にアメリカとの合意、少くともアメリカの理解を得ておかねばならぬと考えていた。

たまたま、その年の十一月十四日、キッシンジャー國務長官が、中近東諸国歴訪の帰途来日した。そこで私は、キッシンジャー長官に日本政府のアラブ政策を説明し、意見を求めたところ、彼は日本政府の方針に反対で、「中近東諸国に対する対応は、米国政府に任せたい。軽々にアラブ諸国に当ることは、むしろその輕侮を招く虞おそれがある。日本はむしろ消費国の立場で、エネルギーの技術開発や備蓄に協力されることが肝心である」ということであつた。

しかし、政府の中近東政策修正の決意はいよいよ固く、私は政府部内で、日と共に孤立化する状況に追い込まれた。私はキッシンジャー長官の東京滞在中、ついにその理解が得られなかつたので、ワシントンの安川大使に訓令して、執拗に交渉させた。その結果、米

国務省もやっと、「日本政府の中近東政策の修正には賛成できないが、かかる修正をせざるを得ない」という日本政府の立場は理解できる」という声明を出してくれた。かくして十一月二十二日、中近東政策の一部修正に関する二階堂官房長官の声明が出される運びとなったのである。

こうしたいきさつを顧みるまでもなく、ラスク、ロジャース、キッシンジャーの歴代国務長官と私は、いずれの問題でも、必ずしも意見の一致をみていたとはいえない。しかし、いずれの場合においても、相互理解を欠いたことはなかったと確信している。私はこれらの方々との交渉に、一抹の悔いも、一片の不信の影もなかったことを喜んでいる。私は、日本とアメリカのために、そのことに満足を感じている。

名譽学位

私の二度目の外務大臣在任中は、あたかもニクソンの訪中とドルの金兌換停止声明、次いで石油ショックというように、戦後体制の屋台骨を揺るがすような事件が相次いで生起

した。この変化に対応するため、各国首脳の往来もひんぱんとなり、私自身も訪米、訪中、訪ソ、訪欧、訪豪等を通して、多数の各国首脳と接触する忙しい日々が続いた。その何れもが、会議や会談に明け暮れ、各国の首都における飛行場とホテルと会議場を駆け回る旅であった。

ところが、昭和四十九年五月、私は、ニューヨークのジャパン・ソサイエティの年次総会における講演と、エール大学から名誉学位（法学博士）を受けるため、短期間ではあるが訪米の機会に恵まれた。日米間に格別緊張した問題もなく、それは久方ぶりの気軽な旅であった。

五月十七日（日曜日）、私ども夫妻は、自動車でマンハッタン島を縦断して、ハドソン川に沿って北上した。天気は晴朗で、滴るような緑にあふれ、沿道にはドッグ・ウッドの花が咲き乱れていた。静まりかえった森や湖の間には白い住宅が点在し、爽やかな田園風景がはてしなく続いていた。仕事に追われて、アメリカの自然やカントリー・ライフを見るゆとりのなかつた私にとって、たまたま垣間見たアメリカの田園は、静かで清潔で広大であった。

夕刻、ニューヘボンに着くと、街はすでにエール大学の卒業式典のお祭り気分一色に塗りつぶされていた。その夜、総長夫妻の晩さん会が催された。それは、卒業式の前夜祭ともいうべきもので、今年同大学から名誉学位を付与されるものと、いわゆるエール・ファミリーの主なる方々が招待されていた。エール大学理学部出身のインガソル前駐日大使夫妻が、私のためにシカゴからわざわざ参加してくれたのがうれしかった。

二十日午前十時すぎ、大学の広場にはすでに数千人の人が集まっていた。私にも、生れて初めてのガウンと房のついた角帽が用意されてあった。私はそれを着て、卒業式典のひな壇まで、学生や父兄の祝福を受けながら、音楽の調べに合わせて長い人垣の中を進行した。

式は総長の祈りから始まり、学部ごとに修士号を得た卒業生の数と代表者の名前が読みあげられる。卒業生は、自分の属する学部のそれが読みあげられると、かん高い喚声をあげて一斉に起立し、代表者が進み出て卒業免状を受け取っていく。

最後に名誉学位を受ける私どもが、一人一人総長の前に進み出る。総長は、それぞれに對して表彰状を読みあげ、学位の種類によって色のちがった「うちかけ」のようなものを

われわれの肩にかけてくれた。壇下では、教授、学生、父兄の間から割れるような拍手が沸いた。全く夢のような感激の瞬間であった。

最近、外国人でこの大学から名誉学位を与えられた人の中には、西独のアデナウアー、ブランド両首相、国連のハマーシヨルド、ウ・タント両事務総長等がおられる。日本人では、伊藤博文公の名が記録されていた。私に与えられた表彰状には、次のような言葉が綴られていた。

「貴方は、危険なまでに小さくなり、相互依存関係を深めた世界において、世界の最重要国の一つである国の外交政策を指導するという重荷を担ってこられました。貴方は、諸国間の信頼に基礎を置く国際的調和の創造のため、忍耐強く、間断なき努力をつくしてこられました。貴方は、危機によって緊張する世界に平穏さを求め続けてこられました。困難にあたっての貴方の穩かな姿勢は、日米両国間の友情のきずなに新しい力を与えるものでした。エール大学は、貴方に対し法学博士の学位を授与することを誇りとします」

この表彰状の朗読を聞きながら、私は、この学位こそは私に対してというよりは、日本と日本人に与えられたものであるにちがいないという感慨に浸っていた。

経済の停滞と不況の中で

昭和四十九年七月、三木副総理に続いて福田蔵相が田中内閣を去ることになり、私はその後任として、外務省から大蔵省に移り、石油危機後の窮迫をつける財政をにわかに担当することになった。

大蔵省に行ってみると、対外決済の問題が異常な緊張を呼んでいた。大幅に値上りした石油その他各種の資源の決済期限は、容赦なく到来し、日夜、その資金手当に忙殺されていた。私は百方手を尽して、短期資金の取り入れを行うかたわら、中、長期借款の確保に努めた。そのため一時は、「ジャパン・レート」という不名誉な条件をのまなければならぬ場合もあったが、八月の上旬になって、当面する対外支払難を何とか乗り切るめどがついた。

国内においては、じりじり不況が長引き、物価の騰勢が続いた。企業の収益力は落ち、経済はマイナス成長を記録しつつあった。中央、地方の財政収入は、予想を大きく下回り、

国は昭和四十九年度において八千億円、昭和五十年年度においては実に三兆八千億円の歳入欠陥に直面した。政府は、この歳入欠陥を埋めるため、赤字国債の大量発行に踏み切らざるを得なくなつた。これは民間の投資や需要が冷えこんでいる時には、経済を支える力は財政に俟つより他に道がなかつたからである。すなわち、財源の不足を理由に中央や地方の行財政の水準を切り下げて、財政支出を締めることになると、勢のおもむくところ経済は失速状態に陥り、社会不安を招くおそれがあつたからである。

かくて日本経済は、中央、地方を通ずる財政赤字の拡大、企業収益の悪化という環境の中で、独り個人の家計は均衡が保たれ、実質所得が維持され、貯蓄性向も衰えを見せなかつた。財政や企業の犠牲で、家計が維持されているこのような状態は、たしかに健全な姿とはいえず、後に財政の健全化、企業収益の回復等むずかしい問題を残すことになつた。そうした問題も、経済が成長する中であれば、その解決に大きい困難を伴うことはないであろうが、経済が停滞する中でその解決を図ることは、至難な課題であることは言うまでもない。

そこで大蔵省が考えたことは、当然のことながら、財政支出の増加を極力抑える一方、

歳入の確保に努めることであつた。たしかに、高度成長期における大蔵省を中心とする予算の編成には、経済成長に対する期待と甘えがあつた。事実、毎年経済の成長によつて予想以上の税の自然増収が期待できたので、歳出の査定は易きにつく傾きがなかつたとはいえない。このことをまず大蔵省は反省すべきであつた。われわれは最早、そうしたやり方を漫然として踏襲することは許されなくなつていたのである。行政機構の膨張を抑制し、スクラップ・アンド・ビルドを歳出予算編成の原則にしたのも、そのためである。国鉄、食糧、健保の三大赤字源に対し、真剣な対応を始めたのもそのためである。

歳入の確保については、従量課税である酒税の増徴とたばこの値上げを、野党のしぶとい抵抗を排して実行に移した。さらに、財政法に特例を設けて赤字国債発行の道を開いたが、これをあくまでも時限立法にし、毎年国会の承認を求めることとし、なるべく早く、この特例に終止符を打つ方針を確立したのである。また国債の市中消化に備えて、中期割引国債を発行し、投資対象としての国債を魅力あるものにする政策を実行に移しもした。そして、こうした努力を今後計画的に進めるため、財政健全化についての中期的試算をつくり、国会の審議を求める一方、今後の財政運営の指針にしたのである。

他方、大蔵省は、険しい通貨外交の矢面に立たねばならぬことになった。もちろんこれまで、IMFやGATTを通ずる定期的な国際会議はあったが、ドルが金から離脱し、世界の為替制度が変動制に移り、資源危機が顕在化するに及んで、大蔵大臣による国際会議は、いよいよ頻繁になってきた。国際収支にピンチを迎えた国々が、IMFや友邦国に援助を求めることが多くなってきた。OPEC諸国に偏在しつつあるドルのリサイクリングの問題も放置できなくなってきた。こうした状況を背景に、IMFの増資が急務となり、その援助が緊急性を帯びてきた。米、独、日、英、仏五カ国の大蔵大臣と、中央銀行総裁は頻繁に会合して、協議を重ねて対応策を練った。さらに、それらの協議を一層拡大する形で、昭和五十年の一月と八月の二度にわたり十カ国蔵相会議が持たれ、私はその議長をつとめた。こうした中で、私は言葉の不自由と知識の不足を痛いほど思い知らされたが、同時に日本の責任と実力を再認識し、日本が勇氣と誠実をもって、国際経済問題に当たることが一層大切であることも痛感したものである。

三木首相とともに、昭和五十年十一月にはフランスのランブイエ、五十一年の六月にはプエルトリコのサンファンで開かれた五大国の首脳会議にも出席した。もちろん、こうし

た会議によって世界の通貨問題や貿易問題が片づくわけではないが、各国の理解と信頼をつなぎとめて、世界経済の危局を招来しないための会議としては、それなりに評価できるものであったと考えている。かくて私の二年半に及ぶ大蔵大臣としての任務は、昭和五十一年十二月の三木内閣の退陣によって一応終了した。この後私には、新たに自由民主党の幹事長という仕事に、引続き待っていたのである。